

# 学術出版の現況と問題点探る

## 「本を生みだす力」研究者3人の共著

長引く出版不況で学術出版が困難になり、結果、日本の学術コミュニケーションが衰退するのではないかと、3人の研究者が学術出

版に関する共同研究を行った。その成果をまとめた『本を生みだす力』学術出版の組織アイデンティティ（佐藤郁哉、芳賀学、山田真茂留著、本体4800円）が、このほど新曜社から刊行された。

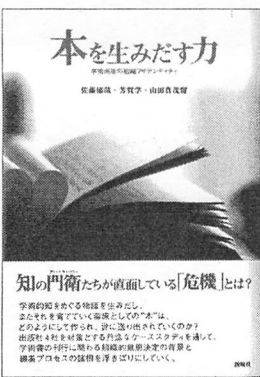
り始めた頃である。それから10年余を費やして多岐にわたる検証・研究を行い、570ページの大著として上梓した。数ある出版関連書のなかでも、学術出版及びその版元を研究対象として詳しく論じたものはほとんど類がなく、貴重な労作である。

研究のスタートは1999年、出版不況が問題にな

る。本書は4部構成で、第1部は出版社がどのように書籍の刊行を決定するのかを、3つのキーコンセプト

を用いて検証。第2部はひとり出版社のハーベスト社、中堅規模の新曜社、大手の有斐閣、大学が母体の公益法人・東大出版会という、4つのタイプの異なる社についてのケーススタディ。第3部はそれを踏まえての再検討。第4部では視野を出版界から学術界、大

学界にまで広げ、学術出版を取り巻く社会的な環境を包括的に論ずる。出発点は本の売行き不振であり、それは10年間で改善されないどころか悪化の一途をたどっているが、検証の過程で浮かび上がる問題点は、そればかりではない。例えば「新書ブーム」で、まともな論文も書いていない若い研究者がいきなり新書を書き、それがたまたま売れたり学問的業績として評価の対象になることがある。しかしその風潮が広がった場合、果たして「知のクオリティ」が守れるのか、と著者らは問いかける。そしてアメリカの学術界では、学術論文に対する「ピアレビュー（同業者の査読批評）」が研究者間で広く行われ、それが学術書のレベルを保つ手段となるだろう。



「本を生みだす力」研究者3人の共著